

優秀賞 二つのごはん

天理高等学校第二部 2年 長谷川 祐穂

高校生活二年目。寮生活二年目。親元を離れて「もう」一年が経つ。いや、「やっと」？長くも短くも感じるこの一年間、私は二つのごはんに支えられている。私は食べることが好きなので、心の面でも支えられている。

一つ目は、毎日食べているごはん。寮、学校で用意してもらうごはんは、疲れている体をリラックスさせてくれる。イライラしたりして沈んだ心を明るくしてくれる。給食を食べたら「この後の授業も頑張ろう」と気持ちを切り換えられる。友達と一緒に食べるとたくさん話ができ楽しいし、一人で食べるよりもおいしいと思う。私の今の生活の中でのごはんの時間はゆっくり心を落ち着けられたり気持ちのスイッチを入れる大事な時間になっている。

もう一つのごはんは、一年前まで十五年間毎日食べていた家のごはん。夏休み、冬休みを合わせて一年に三週間ある帰省の期間は、毎日母と祖母の作ってくれたごはんを食べる。去年の夏休みも、半年前の冬休みも、久しぶりに食べた家のごはんはとてもおいしくて、「ああ、家に帰ってきたんだなあ」と思い、家のありがたみを感じることができた。それは、家から出て寮で生活しているからこそであり、寮に入ってよかったと思っている。が、今でもふと寂しくなり、「家族のみんなに会いたいな、お母さんとおばあちゃんのごはんが食べたいな」と思うことがある。そんな時は今度帰ったら何を作ってもらおうか考える。そう考えると、家での楽しい風景が頭に浮かんでくる。ただ家で食べるだけではなく、家族と食べるからこそほっとする楽しいごはんになるのだと思う。

去年の今頃はさみしくて、家や家のごはんが恋しいだけだったが、一年経った今だからこそ分かることは、寮生活の毎日があるから家に帰った時に幸せを感じることができる、毎日のごはんがあるから元気に過ごすことができる、ということ。二つのごはんはどちらも私にとって大切であり、なくてはならないもの。それに気づくことができた私はとても幸せだと思う。これからも人に、ごはんに感謝して毎日を過ごしていきたいと思う。